

冬越し

自然の中でも野草を主に観察対象としていると、冬には見るものがないなあと感じてしまう。私は、バードウォッチングから入ったので、葉を落とした冬になると鳥がよく見えていいと思った。

それでも、いつごろからか虫に関心を抱くようになると、あれほどいた虫が全く視界から消えてしまう冬でも、虫がいなくなるわけではなく、形を変えてその命を保っている、その様子を実感したいと思うようになった。また、それを伝えたいとも。

昆虫にしる、爬虫類・両生類などは変温動物だから、冬という気温が低い時は動きたくても動けない。だから成体で冬越しするものは少なく、冬になると虫がほとんど見られなくなるので、「冬に虫はいなくなる、いや死んでしまう」と思う人も多い。けれど、死んでしまったら命はつなげない。何らかの形で命を保っているからこそ、春になったら、ひらひらとチョウは飛ぶのだ。その何らかの形が、卵であったり、幼虫で遇ったり、また蛹であったりする。

カブトムシを家で飼っている人は、冬に幼虫で過ごすことを知っていると思う。野外でも、夏に成虫が落ち葉の溜まったところなどに卵を産んで、それが秋には5cmくらいの幼虫になり、寒い冬には比較的温度的の下がらない地中に潜って生き延びていく。クワガタなども幼虫で越冬するタイプもいて、雑木林でも見つかるが、成虫越冬のコクワガタの方を見つけると嬉しい。



伐採木の根元を掻きわけたら、カブトムシの幼虫が二匹いたが、しばらくしていくと、もう土の中に潜っていた



手すりの下の、風雨の当たらないところに産みつけられたジョロウグモの卵のう

以前、秋を代表する大きなジョロウグモの卵のうを見つけ、メスがそばで守っているのを見た時から、冬になるとジョロウグモの卵のう探しが習慣になった。近くの園生の森では、木道の手すりの下の雨風の来ない辺りでは必ずといって見つかる。常緑樹の大きめの葉っぱを巻いて、白いテント状の卵のうを作るのはクサグモで、このテントを見つけるのも恒例となっている。が、だんだん少なくなっているのは淋しい。でも、クモは地面近くで過ごすものが多いせいか、けっこう冬でも落ち葉の下などで徘徊する幼体がいる。ただ、小さすぎて何グモかはハテナの世界・・・老眼もひどくなっているし・・・。

毎月行っている大草では、11月末くらいからオオムラサキとゴマダラチョウの幼虫を探す。いつもいるエノキの下周辺の落ち葉をそっと掻きわけると、大抵1匹や2匹は見つかるが、そこにはオオムラサキの幼虫はいても、なかなかゴマダラチョウの幼虫と一緒に見つかることは少ない。しかも月を追って、枯葉が飛ばされて谷津田の方に行ってしまうのだろう、葉裏に幼虫のついた枯葉が見つかることが稀になっていく。それでも、ここ10年あまりはオオムラサキの幼虫は必ず見つかっていて、真夏に優雅に飛ぶ成虫に出合う確率より高い。ただ、他の場所でもよく見られたゴマダラチョウの幼虫が、ここ4・5年はなかなか見られなくなって残念だ。

もう10年以上前になるかもしれない・・・「寒い冬になって羽化するフユシャクというのがいて、その

メスにはほとんど翅がない」ということを知り、その翅のないメスというのを見たいものだと思っていた。それを、近くの園生の森の手すりで見つけたのだ。今でも、11月末になると、暖かい日に薄茶色のオスが森の中の比較的低い所をひらひらと飛び始める。クロスジフユエダシヤクだ。そのオスが、突如地面近くに舞い降りる・・・メスがいたのか？残念、そこにはいなかった！というようなことをくり返す。アズマネザサが生えるあたりで見られる光景だ。ひらひら舞い飛ぶオスを追いかけても、なかなかメスに出合えるシーンにはお目にかからない。メスは夕方羽化して、フェロモンを出してオスを誘うらしい。だから狙い目は夕方暗くなってからなのだが、冬の冷え込んだ夕方にそう近くでもない森に出かけるのはなかなか難しい（一度だけ出かけたが、身体が心底冷えた）。それでも、翌朝にまだ手すりの上で交尾しているのに、うまくすれば出くわすことができる。落ち葉の積もった地面では難しくても、手すりの上ならとても見やすい。フユシヤクは、クロスジを始めとして、1月、2月、3月と時期によって何種類かのフユシヤクが登場するので、カブトムシの幼虫探し同様、冬の楽しみとなる。



クロテンフユシヤクの交尾（1月）→
クロスジフユエダシヤクのメス（12月初め）←



カタツムリは可愛くて人気があるが、単に殻がないだけで同じ仲間のナメクジの方は嫌がられることが多い。彼らは晩秋に卵を産むらしい。11月の下旬に大草いきものの里で、ヤマナメクジの交尾をたくさん見た年があった。その前の年くらいか、ヤマナメクジの卵塊らしいのが、朽木の下で見つかった。白いきれいな卵塊で、春まで残っていて、4月頃にはなくなったから、孵化したのだろう。カタツムリの殻のついた小さな集まりも冬に土中でみたことがある。



左下の方にあるのがヤマナメクジの卵塊で、右上にしているのは、トラフババヤスデという春先にはよく見られる特徴のあるヤスデ←



↑オオムラサキの幼虫（7匹）

厳冬などに観察会をすると、命の輝きが全く見られないような寒い時期に、虫篇の生き物たちが一所懸命「命」をつないでいる、その姿を自身が見続けたいし、また見て知ってもらいたいと思う。何より、子どもらには朽木をひっくり返して、隠れている虫探しをするのは楽しいことだと思う。ただ、ひっくり返したり、落ち葉を掻きわけるときには、そっとやること、そしてひっくり返した朽木をそのままにしないように伝えたい。冬越しのとき、虫たちは寒さや乾燥から身を守ろうとしてそこにいるのだから。

太田慶子（千葉市）

ムシたちの面白写真

～おや？なるほど！そうだったのか！～

私にとって12月は、1年の振り返りと来年の計画をたてる月です。撮りためた写真を整理しながら「こんなこともあったな～」「もう一度会いたいな」「今度出会ったら飼育してじっくり付き合おう」などと思いを巡らします。中には、肉眼で確認できなかったものが、編集集中に確認できるものもあります。今回は、写真を整理しながら面白いと思ったものを紹介します。

<時間が止まったオオカマキリ>

虫好きの子供たちを集めて秋の里山観察会を行った時に出会いました。道路で日光浴をしているのは、よく見かけますが、この時のオオカマキリは前足を前に伸ばし、翅を開いたまま静止していたのです。私たちが近寄っても警戒することなく微動だにしないのです。おかげで翅を広げた様子などめったに見られない部分を観察することができました。観察を終えると車に轆かれないように草むらに逃がしました。



まるで、飛ぶ直前に時間が止まってしまったかのように見えます



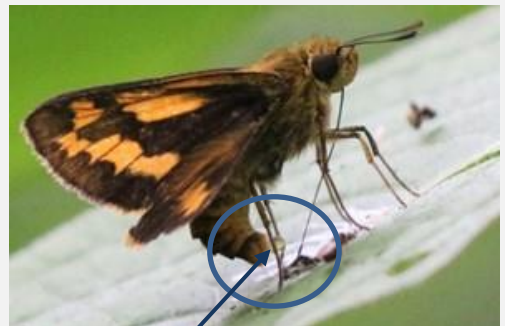
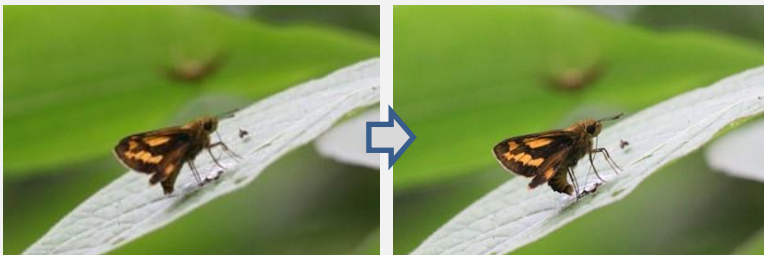
<吸い戻し行動：キマダラセセリ>

セセリチョウの仲間が、鳥の糞にとまっている様子をよく見ることができます。乾いている鳥の糞の場合には、お尻の先から水を出して鳥の糞を緩めて吸う行動をとります。この行動のことを「吸い戻し行動」と呼んでいます。

林道で、キマダラセセリが鳥の糞に止まっていた。口の先をお尻の先の方まで伸ばして、時折お尻の先を曲げます。この様子から間違いなく吸い戻し行動とわかりました。そこで、お尻の先から水を出す瞬間を確認することにしました。近づくと逃げてしまうため肉眼で確認することを諦め（本当は老眼で視力が落ちているのです・・・）、望遠レンズで撮影しました。そして、お尻の先から水を出すところを撮影出来ました。オートフォーカスデジタルカメラに感謝です。



時折、尻の先を曲げて鳥の糞に近づけます。



水滴が確認できます。

西野孝法（千葉市）

ドングリと生き物たちと毒と

昨秋の柏の葉公園での東葛観察会下見の折に珍しい光景を目にした。カルガモたちが群れて飛来し舗装道路の上を歩き回り枯れ葉をひっくり返し何かをついばんでいる模様。歩行者が来て飛び立ったので、何をしていたのか見に行った。道路に白いものが多数付いていた。それは歩行者によってつぶされたドングリのように、それをカモが食べに来たように見えた。指導員になったばかりの頃オシドリはドングリが好きと鳥に詳しい大先輩から聞いたことがあった。オシドリが食べるならカルガモだってドングリを食べてもおかしくはない？（本年1月のホオジロ誌にマガモがドングリを食べる写真が載っていました）

ある方が「オシドリはドングリが大好きというのは怪しい、何故ならアカネズミはドングリだけを食べるとドングリに含まれるタンニンにより体重減少を招き死亡することもある」とネットに載っていたと教えてくれた。アカネズミとオシドリなどカモ類では生態が違うので一概には語れないだろう。オシドリが飛来する町、鳥取県日野町のサイトには「オシドリの餌募集、一番の好みはドングリです」とある。オシドリは鳥取県の県鳥、毎冬千羽のオシドリが飛来するそうだ。日野町にいる間オシドリは好みの餌をたっぷり食べて栄養を付けて北へ旅立っているはず。そもそもアカネズミと栄養豊富なドングリは持ちつ持たれつの関係で、ドングリの豊凶作がアカネズミの数にも関係すると読んだこともある。それなのにドングリを食べるとアカネズミが死んでしまう、とはどういうことなのだろうか。

暮れに丸善で『野ネズミとドングリ』（島田卓也著 東京大学出版会）という本に出合った。読んでみると確かにドングリに含まれるタンニンはアカネズミによくないらしい。海外ではアカネズミだけでなくウシやヒツジがドングリを大量に食べて体調を崩し死亡例もあるとのこと、同じ例は北米のアオカケスやトウブハイイロリスなどでもあるとか。野生のアカネズミはドングリを食べ、食べきれない分は貯食し、それがドングリの木の種子散布に貢献、日本のカケスもドングリの貯食、種子散布貢献で知られている。

ドングリに含まれるタンニンは生き物にとって有害物質だ。健康に良いとされる赤ワインのポリフェノールも日本茶に含まれるカテキンもタンニンの仲間、有害物質であるタンニンを摂っても人間が大丈夫なのは唾液にタンニンに対する防御物質があるからだそうだ。それではアカネズミはどうか？実験ではタンニンフリーの期間を経てドングリばかりを食べさせるとかなりのネズミが死に至った（これがネット記事の出所かも）。しかしフリー期間をなくし少量ずつ与えるとタンニンに対する防御物質ができ（馴化）、またアカネズミはタンニンの少ない個所を選んで食べていることが分かったそうだ。タンニンという毒物があっても栄養

価の高いドングリは冬の貴重な食糧、アカネズミは食べ過ぎによる失敗を繰り返しながら馴化能力を身に着けたのだろうか。

アカネズミとドングリの関係はある程度理解できた。それでは鳥とドングリはどうなのか？は続く。北米カリフォルニアにはその名も Acorn Woodpecker（ドングリキツツキ）がいる。枯れ木に多数のドングリを埋め込む習性があり、図鑑には冬の食料は主にドングリとある。因みに英語で acorn はコナラ属のドングリに限られコナラ属のドングリはタンニンの含有量が多いとか。あくが少なく可食のスタジイやマテバシイは属が違う。鳥はドングリを丸呑みする。アカネズミのようにタンニンの少ない部分を選んで食べることはできない。ある種の鳥には人間のようにタンニンの防御物質があるのだろうか。私にとっての謎はまだ続く。



八千代市 小川洋子

目は口ほどにものを言い

説明を始めて、小学生が中心の子どもが対象になっているとき、わかっているのかな？この説明であっているのかな？別バージョンで行こうかな？悩むことが多いです。この題材でよかったのかな？探りを入れて聞いてみようかな？と思う時があります。

1 グループ7～8人だとしても全員が理解を示すのは、稀でしょう。自分たちが小学生の時どうだったのか。校庭に出るときや、校外学習のときは教室という壁がなく、机がなく、座っている必要もないことで日常を離れ、わくわくして、浮足立った感覚に狂喜乱舞した覚えがあります。題材への取り組み方は真剣だったでしょうか？

校外学習の時は班行動なので、そのリーダーについても、それを任せていいタイプとそうではないタイプがあります。そこは難しいところです。

ここはポイントなのだからと力を込めて説明し、子どもの反応が欲しいと思う時があります。だいたい大人の身勝手でしょうね。

子どもは聞いちゃいません。大嫌いな勉強なのだから…。でも目をキラキラさせる瞬間あります。きっとスイスイ吸収している、キラキラ具合はその証拠と理解することができます。

子どもに対するとき、言葉で引っ張るのか？昆虫や植物みたいな具体物で引きずり込むのか？その時々で勝負かけてますね。

「目は口ほどにものを言い」とことわざがあります。子どもたちは的確に表現する術を持っていません。なかには饒舌な子どももいるにはいますが…。分かり易く言うと子どもは大人のように言葉で表現することがとても苦手です。

子どもの目とこちらの目の焦点が合った瞬間に、私たちの言葉運びも流れるようになる時があります。

ある集団のインタープリターをやった時、私たちが今まで聞いたことの無いような調子で子どもたちを叱る、ののしる言葉を先生役の男性が発する現場に出会ってしまいました。そこまで言わなくてもと思ったのですが、子どもたちの様子を見ると、その目は泳いでいるではありませんか。「また、言ってら～」というように。いくら大人が怒っても効き目はないんだなと思いました。子どものほうが「だれか怒ってる」を、なかったことにしている。

目が泳いだり、キラキラしたりとめまぐるしく、かつ正確に物事をとらえていこうとする子どもの力が垣間見えるなと思います。

(松戸市 藤田 隆)

ヤブコウジ



今浦島の出前授業

八千代市の小学校で4年生の総合学習の時間に印旛沼について学ぶプログラムがありました。外部から講師を招いて、①利根川からの逆流水による洪水対策として江戸時代から続いた治水工事について②印旛沼の水質問題について③印旛沼の生き物についての3部門を学ぶというものです。

①②については夫々の講師が決まったようですが、生き物についての講師の引き受け手が無く人選が難航していたようで、巡り巡って私の所にその話が突然舞い込んできました。

印旛沼の生き物といっても、魚類を始め爬虫類から植物まで多岐にわたるので、私には手に余ると断ったのですが、押し問答の末に野鳥に特化した内容でも良いからと言われ、結局引き受ける破目になってしまいました。学術的な話は出来ないの、これまで印旛沼周辺で撮影した野鳥写真から色々な場面を選んで、プロジェクターで投影しながら紙芝居風な説明で何とか乗り切りました。3クラスまとめて90名超の生徒が、大人しく聞いてくれて、時間切れまで質問が途切れませんでしたから、多少は興味を持って貰えたと思えました。

12月20日に学んだ事の中から生徒がテーマを選んで発表するので参観してもらいたいと誘いがあり、他の講師と共に見せてもらいました。



私が想像していたのは模造紙に書かれた絵や図表を基にグループの代表が調べた事を発表するのかなと思っていたら大違い。

生徒たちは各自が発表したい内容の図、写真などをタブレット取り込んでいて、5~6人のグループに分かれて順次発表するのです。先生と参観者はその様子を覗いて歩く方式でしたから、発表の一部始終を聞ける訳ではないのですが、何より驚いたのはどの生徒もタブレットを自在に使いこなしていた事です。

発表の内容を垣間見るに、多くの情報をインター

ネットから入手したようで、野鳥について私の知らない事柄もありました。

1人の発表が終わると拍手が起こり、互いに質問したり、良かった点などを話し合っていました。

小学校支援で学校に出入りしている人には見慣れたものかも知れませんが、この風景は異国の教室に迷い込んだのかと思う程でした。自分がこの子達と同学年だった頃を思い出すと今浦島の気分です。

私が授業で話した事でインパクトの強かったのはこのコサギですが、片足に指がありません。釣り人が捨てた釣り糸が足に絡みついて外せなくなり、強くひき過ぎて指が切断されたか、壊死したと思われると残酷な説明をしました。

ある女の子から授業のお礼の手紙で、ごみを捨てる人間は悪い。それでもサギが生きていてくれて良かったとの感想がありました。

その他では印旛沼の干拓水田でザリガニを食べて栄養補給しているチュウシャクシギを見せて、渡り鳥とラムサール条約の話をしました。



印旛沼はこの条約で保護されていないと言うと「何で一？」の合唱でした。 佐倉市 坂本 文雄

植物雑感『アカマツ・クロマツ』 マツ科マツ属 赤松（雌松）・Pinus densiflora
黒松（雄松）・Pinus thunbergii

新年あけましておめでとうございます。新春の祝いに関連する植物を考えてたら、昔よりお祝いには「松・竹・梅」という言葉があり、この筆頭になっているのは松であると思い、マツについて書きます。松は別名・常盤草（トキワグサ）とも言われ、年中常緑であることは長寿延命に結びつき、葉の強さから雄々しさのある瑞祥の樹としての象徴になっている。竹は旺盛な成長力があり、竹の子の伸びる勢いはたくましく、これに生命力を感じ成長のシンボルとして愛でられた。梅は寒気に耐えて百花の先駆けとして花が咲くことを寿ほぐんだ。一般的な松は名前の由来になった樹皮の赤いアカマツと樹皮の黒いクロマツの二つを思いうかべる。自然の分布ではアカマツは内陸部の尾根筋や岩山に生え、クロマツは海岸に沿って生えるが、庭園や庭木として親しまれている。海岸の松については唱歌で「松原遠く消ゆるところ」として歌われている白砂青松のイメージがあるが、近年は海岸の埋め立てや護岸工事が進んで、消えてきている。植えられた松も多くあるが、海岸の松はアカマツとクロマツが混在しており、二つが混じったアカクロマツ（アイノコマツ）という種も出てきている。

お正月の家の玄関に飾られる「門松」は、風習も変わってきており、家の中でのみ正月の飾りつけをして、玄関の門松は使われなくなっている。広辞苑によれば、門松は「新年に、歳神さまを迎える依代として家々の門口に立てて飾る松」とあるが、古くから木の梢に神が宿ると考えられたところから、歳神さまを正月に迎える依代の意味合いだが、悪霊や邪気が家の中に入るのを防ぐ意味もあるそうだ。江戸時代の都市部では、「松は千年、竹は万年を契るめでたいもの年の初めの祝い事」として考えられていた。門松は7日や小正月のどんど焼きで焼却するのが多い。元日から7日（昔は15日）までを「松の内」と言うのもこの為である。門松も簡素化されているが、太い竹を3本束ね、根元を若松の枝を配置し、下部を藁で巻く形式のものが多い。太い竹が中心に座り、松が後ろに隠れ気味な状態は門松というより門竹という感じになっている。竹の先端部の形状は、斜めに切った「そぎ」と、真横に切った「寸胴（ずんどう）」の2種類がある。一説では、「そぎ」は徳川家康が始めたもので、徳川家康が三方ヶ原の戦いで武田信玄に敗れた直後、武田方から送られた「松枯れて竹、類（たぐ）いなき明日かな」（松平氏の出自である徳川家康が滅び、武田氏が栄える）という句を、「まつかれで たけだくびなき あしたかな」（松平氏は滅びず、武田の首級が落ちる）と読み替えて、竹を斜めに切り落とした門松とともに送りつけたと伝承されている（Wikipedia & NHKのチョコちゃんに叱られる より）



門松に変わって松飾りとして、松の若枝に簡単に注連縄を結ぶ形式の松だけを玄関に立てる形式などいろいろある。

「門松は冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」 一休禅師
この歌は全く今の私の心境そのものです 小島紀彦（我孫子市）